

2018年度ドイツ経営経済学会第80回大会参加報告

学習院大学 小山 明宏

2018年5月23日（水）～25日（金）、ドイツの経営経済学会第80回年次大会が、旧東ドイツのマグデブルグ大学で開催された。今大会は、日本からの参加者は、中央大学の加治教授と筆者の2人であった。

1994年のパッサウ大学での第56回大会以来、筆者は今年で25年連続参加となった。今年から日本経営学会からのオフィシャルな代表として参加することになり、ドイツの会長、フランクフルト大学学長でもあるビルギッタ・ヴォルフ教授に日本経営学会からの代表書簡を手渡した。また開会式でヴォルフ教授から紹介され、25年連続参加に表彰の言葉をいただくことができた。そして2日目昼の「名誉会員昼食会」にも招かれ、ゆっくりとお話してきたのはとても光栄だった。

本大会でのメインテーマは「(Ir)rationalität von Entscheidungen in der betriebswirtschaftlichen Forschung und Praxis」である。「経営学の研究・実務での意思決定の（非）合理性」ということである。ヴォルフ会長によれば、意思決定の記述・分析には様々な方法がありうる。その方法的多様性を受け入れるだけでなく、強みとして使うことが、その利用の有用性を学術的にも豊かにし、強化することになる。我々の研究活動の成果は、直接、実務に影響を与え、意思決定のプロセスを解明して、改善できる、そして人間の行動をより理解し、希少な資源の利用を改善することができる。合理性・非合理性という両極間のアーチを知り、考えることは今大会の中心的関心事で、成果を信じている、とされる。

今大会は例年に比べて暑い中で行われた。そのため外のキャンパス内で談笑するシーンはあまり多くなく、筆者も建物の中にいることが多かった。その中で聞いたシンポジウムの一つに「経営学での研究促進(Forschungsförderung in der BWL)」というものがあつた。学会設定のテーマ(VHB Thema)で、いわゆるDFG(Deutsche Forschungsgemeinschaft)が行う研究資金援助について、その現状を議論するものであつた。その申請、審査、決定について詳しく紹介されたが、審査委員のうちの経営学研究者5人の名前も出て、ちょっと驚いた。昨年7月に急逝されたピコー教授はその評議員だったそうで、やはり痛手である。今後は経営学研究者の審査委員が6人に増えるそうだが、会場で前に並ぶ討論者の中にドイツの経営経済学会次期会長のペーター・ヴァルゲンバッハ教授(イエナ大学)がいて、今後の研究促進について期待を担っていたと考えている。このシンポジウムの最後に、Wenig Anträge, wenig Budget, wenig Chance!と画面に出ていて、何とも気落ちしそうなことばである。

ヴォルフ教授の後任会長のヴァルゲンバッハ教授ともゆっくり話すことができたが、来年はロシュトック、再来年はフランクフルト(マイン)、その次はデュッセルドルフとかなり先まで決まっているので安心であろう。

マグデブルグ大学は15年ほど前にドイツの社会政策学会の年次大会があつて筆者が参加した時は、旧市街のはずれの旧キャンパスで、古い建物がなかなか味わい深いものだったが、今度来たらキャンパスが完全に移転し、まさに現代的建築、そして大スタッフによる運

営であった。旧東ドイツの大学は1990年の東西ドイツ再統一後、完全に新しい体制となっていて、来年のロシュトック大学もおそらくまた新スタッフによる大規模運営になるのであろう。来年のテーマは Dienstleistung im Wandel --- Implikation für die betriebswirtschaftliche Forschung ---である。

